

社会学と歴史*

小 関 藤 一 郎

I

最近のアメリカの社会学で歴史的社会学の一番新しい分析的かつ方法論的方向づけが、資本一国家関係や都市発展と貧困問題に大きい影響を及ぼしていることを中心とする動きが顕著なように見える。AJS の1996年第3号に掲載された Kelvin Fox Gotham と Williams G. Sables の論文 “Narrative Analysis and the New Historical Sociology” にあげられている文献表をみると AJS, BJS, SQ, ST などに現れたそうした種類の論文の数は著しい数にのぼっている。それらの傾向を検討することは本稿の目的ではないが、第二次大戦後長く支配的であった構造機能分析を中心にした種々の理論が中心を占めてきたアメリカ社会学に歴史的社会学の動きが現れてきたことは21世紀を迎えようとしているアメリカ社会の動向を示唆するものと見ることもできるであろうと考えられる。フランスにおいても最近社会科学との連携を密にしている *Annales* 誌は1996年第2号に「社会学者と歴史家」Le sociologue et l'historien と題する論壇を設けて、同誌編集委員であった Bernard Lepetit による Robert Castel の *Les métamorphoses de la question sociale* (1995) の書評と François Ewald による Rosanvallon の *La nouvelle question sociale*²⁾ の書評を掲載して、社会学と歴史の関係についての論究に頁をさいている。これもまた新しい世紀を迎えての西欧社会の中核問題 question sociale の考察が歴史的に考察されるべきであることを明白に示

唆しているといえるであろう。ところで19世紀末ヨーロッパで生まれた古典的 sociology は工業化過程がはじまってきた社会における問題 Question sociale の解決を自らの課題としたのであることを想起しなければならない。工業化社会の推移が種々の難問を内に包蔵しながらある程度順調に進むに伴って当初の社会問題の本質も変化するとともに社会学もそれ自体の要求によってその理論的装置の整備が進めることを余儀なくされてきたのであるが、この理論的装置の整備の過程でもすれば当初の社会問題との深い関連は失われがちになっていった面があるように見える。あるいは19世紀末から生じた古典的論はそれが生じた社会的・文化的・歴史的情況の特殊性に拘泥して、工業化一般の方向づけとの関連を見失ってしまうものも出てきている。たしかに西欧社会における工業化は各国のこれに対する対応の収斂化を、一部で期待されたようにはもたらさなかった。しかしそれにも拘らず歴史の大きな流れは西欧社会に共通の方向性をそこに看取することを妨げるものではなかった。そうした見地に立って以下の論述において筆者はデュルケーム社会学は今から一世紀前において本質的に歴史社会的な企図をもっていたことを明らかにしたいと思う。しかしそれだからといってデュルケーム社会学がそうした企図において完全に成功したということの意味するのではない。デュルケーム社会学は戦後特に構造機能分析的に解釈されることが多いようである。とくにそれは T.Parsons の *Structure of Social Action* における解釈に影響されているところが多いのもあろうが、筆者にはデュルケームにつ

*キーワード：デュルケーム、全体社会の歴史的認識、歴史的 sociology

1) Robert Castel, *Les métamorphoses de la question sociale, Une chronique du salariat*, 1995, Fayard.

2) P. Rosanvallon, *La nouvelle question sociale, Repenser l'Etat-Providence*. 1995, Edit du Seuil.

いての Marx 的解釈と同様構造機能分析的解釈も大きな誤りをおかしたもので、むしろ本質的にはデュルケームは歴史社会学的方向に解されるべきであると考えられる。その意味で、今日改めてデュルケーム社会学説の再検討を試みることの意義があるのだと思うのである。

II

デュルケームはフランスの大学で初めて社会学の講義をし、「社会分業論」「自殺論」「社会学方法の規準」「宗教生活の要素形態」「道徳教育論」「社会主義論」³⁾ 等々の著作によって社会学の基礎を確立したのであるが、その理論は一つの体系として完成したものとなっていたのではない。筆者が彼の理論を歴史社会学的であると解するのも、彼の著作に歴史社会学的というような表現があるからではない。またデュルケームの著作には彼が最も重大な関心をよせていた問題である家族や道徳といった問題についても完成されたものは残っていないのである。それだけでなく社会学の方法を扱った著作はあるがそれは19世紀末にかかれたもので、歴史的な関係を扱ったものなどはそこにすべて収められているわけではないのである。そこでわれわれはデュルケームにおける歴史的推移に関する考察がどのように扱われてきているかを著作を通じて例示してみなければならぬ。その意味で筆者は第一にデュルケームの家族社会学序説をあげたいと思う。これは1888-89年のボルドー大学における講義としてかかれたものであるが、その前年度の講義「社会連帯」にひきつづいて行なわれたものである。そのサブ・タイトルは家族：その起源、主要類型となっている。⁴⁾ この中でデュルケームは次のようにのべている。⁵⁾ 「われわれは現在および過去のあらゆる社会がその変種にしかすぎないような二つの大きな社会類型を構成することが確実に可能となった。そして一方で組織化されていない社会すなわち血縁者の群（ホルド）から段階的ではあるが都市にいたる無定型社会といわれる類型と、他方、都市にはじまり現代

の大規模な国民社会にまでいたる段階を含む国民社会（国家）への類型とを区別してきた。ついでこの二つの社会類型の分析の結果社会連帯のきわめて異なった二つの形態を発見するようになった。その一つは意識の類似、観念と感情の共同にもとづくものであり、もう一つはこれとは反対に機能の分化および分業の結果生じたものである。…そしてわれわれは後者を有機的とよび、前者を機械的とよぶことにした。…われわれはこの定義の用語に満足しているわけではないが、よりよいものが見つからないので、これに満足している。厳密にいえば、この二つの種類の連帯は他方なしに一方だけが存在することはできなかったといえるかも知れないとはいえ、われわれは機械的連帯をそのほとんど絶対に純粋な状態において未開社会において見出すことができたのである。」これに反して分業の所産であり、全体の統一を要請しながらも各部分にそれぞれの独立を認めているもう一つ上級の連帯をもっともよく観察することができるのは大規模な近代社会においてである。上述したところを確認することによって、デュルケームはこの二つの連帯が変化するときその基盤となる条件を決定することができたのであるといえ、「社会の範囲が狭いときには成員の接触がより緊密であり、生活がより完全に共同体的であり、しかも思想の対象がほとんど絶対に同一的であることによって類似の方が差異に優越し、したがって全体が部分に優越することをみたのである。反対に集団の要素が多数となりしかも一貫した関係をもちつづけるにつれて闘争の強化が戦闘員の数とともに増大していき、それが拡大されたこの戦場では各個人が分化していき、各人はその任務と特有の生活様式を選ぶのでなければその存在を維持できなくなる。こうして分業は社会的均衡の第一次的条件となってくるのである。社会の量および密度の同時的増大こそ今日の国民社会を昔のそれから区別する区別する大きな新しい特徴である。またそれは歴史全体を支配する要因の一つである。いずれにせよそれこそが社会的連帯が経過してきた変遷のあとを説明する原因なのであ

3) デュルケームの全著作の中ここにあげたのは第二次大戦までに刊行されたものだけである

4) 家族社会学序説は拙訳「デュルケーム家族論集」中の第一章となっている。

5) 同上2-3頁

る。」⁶⁾ デュルケームは家族の研究にはいる前に社会学の説明が到達した成果をこのように要約しているのである。この社会連帯の経過した変遷についての説明は後に「社会分業論」において敷衍されるのであるが、この説明は正しく人間社会の歴史の流れを支配する法則とよぶことができるものといえる。未開から高級な大規模な現代社会への発展といったきわめて大雑把であり且つまた有機体的図式ではあるが、一つの歴史の変遷観が社会学研究の前提となっていたことをこの叙述は明示しているのである。この歴史の変遷についての根本的考え方はデュルケームのあらゆる著作を通じて変わらない基本的なものである。だから分業は近代社会の基本的な特徴であり、人間の社会の歴史的發展の到達点なのである。しかし、この全体社会にふくまれる各種の機関、(家族もその一つであるが) 宗教、教育、政治などの諸機関や制度の変遷などについてはどういう法則ないし図式が考えられるのであろうか。家族について見ていこう。デュルケームは家族の研究を出発点を今日のヨーロッパの大規模な国民社会において存在する家族におく。⁷⁾ それは今日小家族とよばれるもので、夫婦と未成年の子女から構成されているものといってよい。ただ今日のといってもデュルケームが家族社会学序説をかいた19世紀末と現在では100年も隔っているし、工業化の著しい発展は家族にもいろいろ大きな影響を及ぼしているから、家父長的家族の残存したものもあったかも知れないから、すべてを核家族とわり切ることはできない場合もあったことを考えなければならない。が起原において氏族 (Clan) という形態は一つの家族社会である⁸⁾と認めているが、この氏族から近代の夫婦家族にいたる変遷の過程を特徴づけるものとして家族機能の減少、今日用語でいえば家族の副次的機能の喪失といった傾向を指摘してい

るのである。だから、自殺論において、近代社会の発展に伴って余りにも過度な自殺の増大に対する対策として家族の予防乃至阻止的傾向を期待することは効果の少ないことが指摘されたのであった。つまり家族がその本質的機能の遂行にしかその存在理由を見出し得なくなっていくことを示唆する指摘しているのである。⁹⁾

これと類似した機能の縮小というか、機能の分化ともいべき傾向が歴史的な方向として指摘されているのが宗教である。デュルケームは大著「宗教生活の要素形態」に到達する前から宗教についての見解を発表しているし、それら全体を「宗教社会学論文集」¹⁰⁾として筆者は編訳として公刊したが、その中でボルドー大学に就職する以前にかかれた書評で宗教を社会の規制的機能としてとりあげていることも想起されなければならないのである。それは「分業論」の中においても分業の発展と関連して人間社会の未開時代にはあらゆる社会現象があらゆるものを包含していたが、社会分化の進むのに伴ってその内包を減少させていっていることが言及されている。とくに宗教が道徳と厳密に結びついていたため、神の権威のない道徳は考えられた状態が支配的であったが第三共和制成立以来政教分離の政策が着々と根をおろしていった時期にデュルケームはこれを支持して著作「道徳教育論」¹¹⁾において道徳は神に代って社会において支配的で上向的力をもっている個人主義をその基盤としてそこに支持を求めべきであると主張しているのである。そうした主張の発端はデュルケームのドイツ留学中の「ドイツにおける道徳の実証的研究」¹²⁾に関する報告にすでに存在しているのである。デュルケームはこうして宗教現象のもつ力は社会分化とともに薄れていき、他のものに代られていくという主題を明示的に証明したのである。そして最後の大著の結論に

6) 前掲書3頁

7) 前掲書6頁

8) 前掲書32頁、デュルケームは相互に血縁関係にある人びとの集団を氏族とよぶが、それら血縁者はトーテムをもつことによって相互に血縁者であると認知するのだとのべている。(同書31頁)

9) E. Durkheim, *Le Suicide*, 1897.

10) デュルケーム「宗教社会学論文集」

11) E. Durkheim, *L'Education Morale*, 1925.

12) (小関、山下共訳) デュルケーム「ドイツ論集」1993年行路社、この中の報告「ドイツにおける道徳の実証的研究」81-162頁参照。

においては科学 Science さえ宗教に具現化される conscience collective に代るものであるという主張さえ現れているのである。¹³⁾ そして共和制下のフランスにおいては「個人主義が国民社会の道徳的統一を確保できる唯一の信念体系である」とまで変化してきているのである。¹⁴⁾ こうした宗教の変化は宗教から諸社会現象の分化といかなる関係に立つのかはたんに分化の傾向、分化への圧力として見ることはできない。したがってそれまでのデュルケームのいう分業、分化の法則とは若干質の異なった現象として説明されるべきものなのであろう。

III

ところでこの問題の考察を進めるため、デュルケームが扱ったこうした法則は他にもあるのではないかを調べて見る必要がある。まず分業論に言及されているものに国家の機能の拡大の問題がある。この問題は「分業論」第二版の序文「職業団体についての考察」quel ques remarques sur les groupements professionnels (1902) および「社会学講義」*Leçons de sociologie, ; Physique des moeurs et du droit* (1950) と関係するところが多いのであるが、国家が Kant などが強調した警察国家から産業国家、福祉国家へと進むにつれてその機能が著しく増大していく過程についての叙述が分業論においてのべられ、同時に国家は国民社会の社会的頭脳であり、思考、熟慮はするが、遂行はしないという立場をもつにいたってきたことがのべているのである。国家の機能の増大の傾向は正しく法則ともいえるように先進各国において見られる現象である。しかもこの機能の増大が個人主義の確立に伴っているばかりか、国家は個人主義確立のための地盤づくりをはじめていることを正当にも指摘したものである。G. Balandier は1976年の *Le Monde* 上にデュルケームが個人主義は国家により解放されたとのべたことも報道

されている。同時にわれわれはこうした国家の機能の拡大と共に忘れることのできない問題に、*Année Sociologique* 第一輯の四巻に掲載された「刑罰進化の二法則」“Deux lois de l'évolution pénale”があることを指摘しておきたい。この論文は不思議なことに余り注意されずにいたもので、わが国でも最近織田年和によって訳出されただけである。¹⁵⁾ この刑罰進化の法則というのは次の二つである。¹⁶⁾ 一つは「量的変化で、社会がより下位の形態に属しているほど、そして中央権力がより絶対的な性格であるほど、刑罰は重くなる」というのである。もう一つは刑罰の質の様態に関する法則でそれは「罪の重さに応じてある一定期間自由を、そしてただ自由だけを剥奪する刑は次第に刑罰の通常的な形態となっていく」というのである。この後者は今日文明社会一般において見られる刑務所の制度化をさしたものである。未開社会においては刑務所は存在しなかったのである。いずれにせよ、刑罰の進化の法則は未開社会から文明社会への移行について妥当するものと見られているのである。そしてこの法則は「社会分業論」においてのべられている刑罰的な禁止的応報的制裁から原状回復的な制裁への進化の法則の補足的なものといってもものと見てよいであろう。

上述してきた進化の法則は社会の機関または制度などについてあてはまるものであるが、それらは例えば国家のように環節的狀態から有機的狀態への推移に応じて拡大していくものもあれば、刑罰のように禁止的制裁を伴うものから原状回復的制裁へと変っていくもの、宗教のようにそのうちから他の多くの機能を派生せしめていくもの、家族のように副次的機能を喪失していくものなどその変遷には多様な形が見られるものがある。しかしそれらの総体としての全体社会についての変遷は、あるいは特徴の変化についてはどうなのかという点は明示的に説明されていない。デュルケームは社会は全体としてその要素のたんなる総和以上のものであることを力説している。

13) E. Darkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, Conclusion. p. 593-638.

14) デュルケーム「宗教社会学論集」p. 43

15) 作田啓一「デュルケーム」の中293-328頁 なおこの論文の英訳は Marc Gane, *The Radical Sociology of Durkheim and Mauss*, 1992 に収められている。(p. 13-58)

16) *Année Sociologique* (1 série) vol. 4 (1899-1900) pp. 65-95

社会は *manières de faire* (行為の仕方) の全体すなわち *manières d'être, manières d'agir, manières de penser et de sentir* の全体の総称であるといえる。とすれば総体としての全体社会の歴史の変遷はどう捉えるべきなのであろうか。そこに基本的で重要な問題が残されるのである。さらにデュルケム社会学の中においては教育のもつ重要性についての認識が強いことを忘れてはならない。これは彼がボルドー大学でフランスで最初の社会学の講義を行なったときから教育学のそれも合わせて担当したという宿命的なめぐり合わせも関係するのであるが、彼の著作の中でも「道徳教育論」*L'Éducation Morale* をはじめ「フランスにおける教育思想の発展」*L'Évolution pédagogique en France* などがあり、さらに *L'Éducation et sociologie* に含まれる教育に関する考察の諸論文がある。¹⁷⁾ この教育という社会的現象は他の諸現象と異なって、社会の理想実現への志向をその中に包含する社会独自の活動である。しかもこの理想は他から与えられたり、課せられたりするものではなく、社会が自から社会の中に理想を創出する過程はある面では宗教の熱狂的な *image* 創出のそれと類似している面もあるが、この教育の理想創出の過程はどのような歴史的推移を経ていくのであろうかという問題も当然そこに出てくるのである。これらの問題についてその一部は最近「社会学方法の規準」*Les règles de la méthode sociologique* (1895) の刊行100年を記念してかかれた Jean-Michel Berthelot の著作において明らかにされているように思われる。この著は1985年 *Durkheim, Les règles de la méthode sociologique* と題して刊行されたのであるが、この前文に *Les règles de la méthode sociologique ou l'instauration du raisonnement expérimental en sociologie* が付されている。つまり Berthelot のこの書

はデュルケムの社会学方法の規準を社会学における実験的推論の創設とみてその立場からデュルケムの方法論を解釈した新しい意図をもった試みである。この前文は1995年に刊行された Jean-Michel Berthelot, *1895 Durkheim L'Avènement de la sociologie scientifique* に収められたものである。¹⁸⁾ J. M. Berthelot はこれより先にデュルケムとウェバーの接点をさぐった「デュルケムとウェバーにおける因果律の問題」という関心をよぶ論文を発表し両者に関する従来からの誤解をとき、むしろ両者の因果律の考え方は収斂の方向を示していることを明らかにしている。¹⁹⁾ J. M. Berthelot の「社会学方法の規準」についての解釈は第一にこの書を社会学における科学的作業の規則確立を目的としたものとみる。²⁰⁾ 科学的作業の規則確立は方法論の問題であるが、それは同時に科学の正当性を基礎づけることになる。この強い関心が著作の構成を支配しているのである。そこから社会事実を事物として扱えという要請がでてくる。デュルケムは今まで社会学は多かれ少なかれ事物ではなく概念とかかわってきた。が科学として社会学はそれを排除しなければならない。として彼は科学としての社会学の正当性をその対象の自立性と外在性の理論の基礎の上に打ちたてた²¹⁾のである。こうして社会学の対象である社会的事実は独特の实在 *réalité suis generis* を構成することになるのである。だからそれは所与として演繹されるものではなく、観察可能なものとなるのであるが、意識の状態(社会的事実)を外から観察可能とみることはそれに対する実験的合理性の確立性を確立するものとして、革新的な企図なのである。²²⁾ ところで人間の行為に対する科学的な合理主義とは何を意味するのか。それはまず事実を定義し、分類し、説明し、証明することなのである。これらはデュルケムの

17) このほかに教育に関する注目すべき著作1976年に完了した *Textes* (III vol.) の中にも多くふくまれている。

18) この著作はこのほかに四つの章と結論を含んでいるが同書はデュルケムの著作のもつ現代性 *actualité* を強調している。

19) J. M. Berthelot, "Le statut de la causalité chez Durkheim et chez Weber", in M. Hirschron et J. Coenen Heuthen, *Durkheim, Weber vers la fin des malentendus*. 1994

20) *Op. cit.*, p. 11

21) J. M. Berthelot, *1895 Durkheim, L'Avènement de la sociologie scientifique*. (1995) P. 186. J. M. Berthelot は *Règles* を論証的、認識論的、及び分析的見地からみて今日性 *actualité* をもつものであるとしている。

22) J. M. Berthelot, *Durkheim Les règles de la méthode sociologique* (1988) p. 26-27

*Règles*²³⁾において開陳されているところである。がこの中とくに分類は社会の現実の歴史的面に関係するので、少し詳細に見ることにする。社会的事実の分類は、次の段階である説明のため多様な現実を類や種に区分する作業である。デュルケームの用語によればそれは一定数の types 類型に整理することである。この類型への整序は *Règles* の中においてだけでなく社会学年報の序文においてもその必要性が強調されている。²⁴⁾ 具体的にこの分類はどのような基準によって行われているのであろうか。分類の基準の問題についてデュルケームのとった方法は組み合わせ combinations すなわち最も単純な要素である環節の組み合わせである。そこに生物学との類推の色合いが強く残っているが、デュルケームの図式は単純な環節の結合または融合による組み合わせによる段階的発展で、各段階の結合の特質はその構成要素またはその結合の様態からその特質をひき出しているのである。具体的にはデュルケームは最も単純な環節つまり単一環節の社会を Horde 群と名づけ、大体未開民族において Clan (氏族) とよばれるものかそれに当ると考え、そこにふくまれる環節の数がまずに従ってその次の段階を Tribus (部族)、そしてその次の段階を部族連合と考えている。家族社会学序説で説明されている歴史的進化の過程は正しくこの図式である。そして部族連合の次の段階が古代都市 *citè antique* であると見られている。そしてこの古代都市の段階において分業がはじまり、その構成は漸次有機的なものとなってくるのである。だからそこには構造的類型の思想は根本的に欠けている。そしてこの分類の考え方は J. M. Berthelot もいうように反理論的先入観によるものであって²⁵⁾ある。そしてこの先入観は理論的極ではない二つの極データの極と形式主義の極の二つによって表明されている。こうした図式化は哲学的な先験性による

ものではなく、むしろ実証的とよばれるべき立場からなされるもので、それは実験的な推理の適用によるものである。しかしまだそこには理論の介入は見られない。²⁶⁾ 理論はこの説明の段階つまりこの推理の適用による説明とその証拠とともに始まるのであってそれは因果律の原理に依存するのである。²⁷⁾

そこでわれわれは *Règles* の試みの本質的な部分にふれることになるのであって、定義や分類の作業は真に説明的部分への第一歩にすぎないのである。²⁸⁾ と同時に因果律による説明が適用されるのは主として分業の発達した古代都市以降の高級社会に限られることになる。従来の社会学の中には社会現象が何に役立ち、どういう役割を果たしているかを明らかにすることで説明を終えたと考えている人が多いが、デュルケームはそうした方法は二つの異なった問題を混同することになる、と見る。²⁹⁾ どう役に立つかということはそれがどのようにして形成されたかを明らかにすることにはならない。その果す役割は当該社会的事実の特徴を示しはするがそれを作り出しはしない。どうして生じたのかはそれとは別の原因にもとづくのである。目的論的説明は原因の解明とはならない。何故なら、ある社会的事実はその用途とは別の原因によって説明されなければならないからだ。またコントのように人間性に帰着させることも真の説明にはならない。例を分業論をとることにしよう。コントでは社会分業がたえず進展していくことが人間が歴史の進歩していく中で新しい条件の下で生存を維持するために必要であるからと説明されたが、それはこの傾向(不適切な用語であるが保存本能)に重要な役割を認めたことになる。しかしそれ単独ではごく初歩的な分業を説明はできない、というのはそれはその依存する条件が実現しなくては何の力を発揮できないからである。³⁰⁾ また分業の効用が認められ必要が感じら

23) *Les Règles de la Méthode sociologique* の略。(以下略して用いる)

24) *L'Année Sociologique*, vol. 1 et 2 の Préface 「ここで社会学は類型の分類を行うことで歴史と区別される」とのべられている。

25) J. M. Berthelot, *Durkheim, Les règles*, p. 25

26) *Op cit.*, p. 26

27) *Ibid.*

28) *Ibid.*

29) *Op cit.* p. 183

30) D. T. S. I, II の要約

れるためには分業が予じめ存在しなければならないとしても、個性間の相違の発達がこの分業の発達を促進すべきものなのであった。³¹⁾ また保存本能が分業の萌芽に力を与えるようになるのも自然的ではなく、一定の原因なしには生じるのでもない。この本能が新しい分化の径路をとり、われわれに従わせるのも、従来どおりの径路が都市の人口密度によってふさがれてしまったため方向を転じさせるため生じたのである。そうでなければ他への移住か、自殺か、犯罪しか路はなかったからである。われわれが目的論に戻ることができないのは上述のように社会学的説明に人間的要素を認めることを拒否しなくても自然に不可能となるからなのである。

そこで、われわれは社会現象を説明する場合それを生ぜしめた動力因 *cause efficiente* とそれが果たす役割またはその効用とを区別しなければならなくなるのである。³²⁾ ここで役割とか効用というのは目的などより適切だからである。その意味で社会的事実の決定的原因は個人的意識の中に求められるべきではなくするのである。その代りに社会的事実の決定的原因は先行する社会的事実の中に求められるべきことになるのである。そしてこの際社会は個人のたんなる総和ではなく、その結合 *association* という関係のシステムであることが確認されるのである。先行する社会的事実とは個人的意識に対して先行することであり、社会における人間の関係はその構成員である個人に先行するという意味である。だから機能についても、その原因についてもこの規則が妥当する。社会的事実の機能は社会的なもの、すなわち社会的に効用ある結果を産出することであるが、しかしそれは同時に個人にも役に立つことはある。ただこの偶然の合致の結果はその存在理由ではない。デュルケームはそこで機能についてもそれはつねにそれが何らかの社会的目的と一致して支持する関係の中に求められなければならないのである³³⁾ とみる。社会的事実の決定的条件は構成員の結合

によるのであるから社会的事実はこの結合の仕方によって変異する。すなわち社会を構成する部分の結合する仕方によって変異する。従って生理学的事実も形態学的事実もともに社会の内的環境を構成することになる。そこで次の規準がひき出されてくる。すなわち、「何らかの重要性をもつ社会過程の第一の起源は内的環境の構成の中に求められなければならない」³⁴⁾ のである。ところで J. M. Berthelot はこれを詳述して、この内的環境を構成する要素の中には事物 *choses* と人格 *personnes* が区別されると見る。³⁵⁾ 事物とは物的対象として社会に合体されている事物のほかに先行する社会的活動の所産である法規の類、確立した習俗、文学芸術の記念碑等々があげられる。しかしそれらから社会変化を決定する原動力は出てこない。それらが社会の発展に速さや方向にある力をもって介入することは否定できないが、真の生きた原動力とはなり得ない。その主動的要因は人間的、人格的要因にはほかならない。³⁶⁾ Berthelot はこうした意味でデュルケームの因果律の解明においてこの内的環境の重視の意味を理解するのである。たしかにデュルケームが *Règles* をかいた時期までの考え方は上述したとおりである。しかし筆者はデュルケームの説明は更につけ加えられるべきものがあると考え。それはこの内的環境のいわば層位構造というべき問題である。

それは明示的には表現されてはいないが、デュルケームの用語を整理していくと内的環境の層位的構造は包蔵されていたと考えられるものである。その一つは内的環境が層位的構造をもっていると見られる点である。デュルケームによると社会的事実 *Règles* の第一章に明らかにされている *manieres de faire* の総体である。それは *manieres d'agir de penser er de sentir* から成り立っている。デュルケームはそこに世論のような *courants sociaux* も住居の様式や人間が土地に居住する様式も皆ふくめている。がそれらはみな同じ次元にあるとは規定していない。すでに G. Davy

31) J. M. Berthelot, *op cit.*, p. 186

32) J. M. Berthelot, *op cit.*, p. 188

33) *Op cit.*, p. 203

34) *Op cit.*, p. 205

35) *Ibid.*

36) *Ibid.*

は1911年にかいた *Durkheim, choix de textes* の冒頭の論文でそのことを示唆しているし、また *Règles* の第一章を注意してよむと読みとられることであるが、社会的諸事実は推互に並列的關係にあるのではなく、層位的關係にあるのである。内的環境はこのように層位關係をもっていて第一の表層は形態学的事実、その次ぎに機能的事実、第三の意識活動の層に価値理想形成層があるといえる。社会学的観察はこの最奥の層に到達することができるし、またそこに到達することによって社会学的観察にあるべき姿についての洞察 vision をもちうるのである。デュルケームのこの洞察は1905年の「道徳的事実の決定」*Déterminisme de fait moral* において明かに観察されるのである。社会における理想創出の活動なくしては人間社会の世代間の推移を通じこの継承は不可能である。もちろんこの理想創出は外部社会からの影響をうけて練成されていくことがあり、その意味で価値創出の層は開かれたものであることが必要であるが、この層の存在がすべての社会にあると考えることは社会の真の動学的把握に不可欠のことである。また Balandier が指摘したように³⁷⁾ 層位間の結合は固定した一定の形をとるのではなく、時代により、状況によって種々の組み合わせが可能であるが、その一定時点における組み合わせは構造的連関を示しているというべきである。しかし何よりもこの構造的連関において注目すべきことは、理想の創出が歴史の展開において常に他の構成要因をリードして大きな力となってきたことである。デュルケームの場合こうした理想創出の展開による説明は彼の死後1938年 Maurice Halbwachs の序文をつけて発表された *L'Évolution pédagogique en France*³⁸⁾ 2vols において展開されている。これはある意味でフランスにおける中等教育の歴史とも関係するものであるが、Steven Lukes の *Émile Durkheim*³⁹⁾ によるとデュルケームがこの講義をはじめたのは1902年ボルドーからパリに移ってから以降のようである。つまりこの書は前記の 'Détermination du fait

moral' の発表された頃からで、デュルケームが価値判断を事実判断と平行して道徳を解釈し始めた時期にあたりと考えられる。

デュルケームはこのフランスの教育思想の出発点をギリシアのアカデミアでなく、ゲルマン時代の教会付属学校に求めているが、これは宗教の要素形態にトートズムに求めたのとは異り、中等教育における統一的な教育の思想の萌芽を求めたもので、すでに教育の理想についての理念型をつくりあげ、その萌芽を中世以前の教育付属学校の理想に求めたものである。そしてこの萌芽がキリスト教と結びついて中世のスコラ主義思想として発展していき、それがルネッサンスにおいて人文主義思想となっていく過程が、この著作の中で豊富な資料にもとづいて展開されたものである。それはさらに、ジェスイットのコレージュを経てルソーの教育理念やドイツ Realschule の理念と結びつきフランス革命以降のリセー教育となって発展していった経過の叙述によって継承されている。こうして更新される社会的理想にもとづく教育改革の方向をも示唆したこの著作は類例のない展望にみちたテキストである。その点でも *Règles* にのべられた因果律による説明の続版ともいふべきものである。ただこの書は1938年第二次大戦直前に刊行され、久しく絶版だったため、注目されずにいた。Philippe Besnard は "Anomie" においてデュルケームの本質はアノミー学者でないことを力説したが、正しく20世紀の著作からはアノミーは完全に消失していくがそれ以降デュルケームの関心の焦点は来るべき社会の基本的価値となるべき humanisme の伝統をつぐ individualisme であり、それをいかに定着させるか—教育の問題も根本的にこれと深くかかわっている—の問題であろう。彼が第三フランス共和制と一体化したと見られるくらい、近代フランスの理念擁護のために努力したのもこの問題と関係している。現実の日常生活的行動では政治へのかかわりを断念したデュルケームは著作活動では政治への関心は道徳への深い関心とともに休む

37) G. Balandier, *Sens et Puissance*. Première Partie

38) この書はしばらく版が切れたままであったが、1969年第二版が刊行されこの時以降上下二巻にまとめられた。この英訳が刊行されたのは1977年である。

39) この著作は1972年初版で、Penguin Books にはいったものは1975年以降、版を重ねている。

ことなしにつづけられた。そして社会学と歴史の密接な関係を追求しつづけたのであった。デュルケームの社会学年報第一輯編集担当者当時の協力者 Maurice Halbwachs は今日の *Annales* の前身の *Annales d'Histoire Sociale* に参加しており、Halbwachs の教えをうけ、C. Bouglé の助手をつとめたことのある Georges Friedmann も *Annales* 誌に関係していたことを考えるとデュルケーム社会学が根本的に歴史との接触に志向していたことは明白である。ただ上述したようにそうした結びつきを積極的に活かしていく概念上の装置に明白な拠点が示されなかった。さらに、社会の層位的構造の把握が明示されず、理想的創出の作用の面の位置づけが明かにされなかったためともすればその社会学は秩序維持の面だけを強調するものとしてうけとられたのである。しかし秩序維持といっても Conflicts を内包する動的秩序の要素はデュルケームには含まれていたのである。J. M. Berthelot の解釈はその点を明かにしたものであるといえよう。しかし何といても百年前の古典であるデュルケーム理論から今日の問題についての直接のヒントを求めることは意味をもたない。われわれは100年前にデュルケームが現実の今日性をもった社会問題に対して正面から当たっていった姿勢から学びとるべきなのである。そしてその歴史的本筋の方向づけを示してきたのが19世紀末から20世紀にかけてのフランス近代社会だったのである。

IV

最後にこの問題と関連して是非指摘しておきたい点が残されている。それは1981年にアメリカで刊行された社会学と歴史の接点を扱った Charles Tilly の *As Sociology Meets History* におけるデュルケーム論である。この書はアメリカの社会的非連続 Social Discontinuity 研究の叢書の一つとして刊行されたのもで、George C. Homans に捧げられている。Tilly のデュルケーム批判は

社会分業、アノミー、および紛争 (Conflict) に関する論述に対して行われている。とりあげられた著作は「分業論」「自殺論」および「宗教生活の要素形態」の三つだけである。とくに Tilly は工業化がデュルケームが生活した19世紀末から20世紀初頭にかけての世界に及ぼした影響についてのデュルケームの見解を社会学の中心的テーマとしてとりあげ、それがアメリカ社会学においても最近まで支配的な問題として扱われたことに対する反省から出発している。⁴⁰⁾ そこで彼は T. Parsons の言葉を引用している。「デュルケームが生涯にわたって根気よく深い関心をよせていた問題は社会システムの統合、人々を結びつける統合の問題である。当時の状況において社会学理論への貢献にとってこれ以上の戦略的焦点は見出されなかった。そればかりかデュルケームが社会学の領域で達成した著作はまったく画期的なものであった。また、彼はその点で全く孤立していたのではなく、しかも彼の著作は当時何人よりも鋭く焦点をつきしかも深い洞察をもつことを示していた。」⁴¹⁾

Tilly はデュルケームが「分業論」および「自殺論」の中で多様な圧力に対応していわば分化していく社会の姿を展開していったと見、この圧力を社会の量の増大と密度の強化として見たと要約している。⁴²⁾ 具体的にはそれは大都市の増大と職業構造の変化である。そして社会は成員に対し分有された意識を通じてコントロールを及ぼす。つまりデュルケームの表現によれば共同意識または集合意識 *Conscience Commune ou Collective* の作用を通じてなのである。ところが分業の進展はこの集合意識 (人々の類似に基づく) を脅かし、全体としての社会が成員の衝動を抑える要求の優位を崩していく。それで従来のもとの共同意識に代って分業にもとづく新しい集合意識が到来して均衡を回復するのに時間がかかる。そこに生ずるギャップがアノミーであると Tilly はみる。しかしデュルケームはこうしたギャップの存在は認めているが、それをアノミーとはどこにおいてもいってはいない。アノミーを詳しく論じることは本稿の直

40) Charles Tilly, *As Sociology Meets History*, 1981, p. 101

41) T. Parsons, *The Structure of Social Action*, p. 118

42) *Ibid.*

42) *Op cit.*, p. 102

接の課題であるからここでは省略するしかないが、Tilly のように分業の進展とそれに対応する集合意識の到来とのずれもがすぐアノミーなのではない。アノミーは Tilly もこの書で認めているように、労使間における対立紛争の激化、大規模工場における細分化労働と労働者間の意思伝達の欠如、あるいは科学の発展による専門分化のいきすぎと統合の欠除など⁴³⁾—多様なものを含んでいる。さらに Tilly は自殺論におけるアノミーについても分業論の場合と同じように言及しているが、自殺論におけるアノミーはかなり次元が異なるものでこれを同一のものとするのはデュルケームを正しく理解することにはならない。自殺論におけるアノミーは近代生活における意識過剰の問題と関係する。自殺類型においてもデュルケームは *egoistique* と *altruistique* とを対比させているが、*anomie* は *fatalistique* と対比させられており、対比の軸は同じものではないのである。

さらに続いて Tilly はデュルケームは機械的連帯から有機的連帯への変化のほかには集合的行為の理論をも展開しているとして、その選択肢の理論をとりあげている。⁴⁴⁾ そこで Tilly はいう。20世紀に生じた工業化、都市化、逸脱、社会統制、集合的行為、等の標準的分析は強くデュルケーム的色彩をもっている。そしてデュルケームの時代にはデュルケームの考えたのは異なった選択肢があったとして、デュルケームの提案に対する J. S. Mill, K. Marx, M. Weber の社会変化に対する見解をのべている。たしかに社会変化の理論乃至は社会改革論は彼と同時代者にもあったであろう。それらを詳しく比較して第三者として立場から、その得失を論ずることはなさるべきであろう。社会運動についての理論の優劣ということを一定の理論に基づいて決定することは学問上支えはないが、工業化の理論といってもどれが最も適正であるかということは社会学全般の問題として決定されたものはない。しかし、Tilly のように Mill や Marx や Weber があるのに Durkheim のモデ

ルが支配的であるのは気の毒なことであるというのは⁴⁵⁾理論研究の立場からは理解しかねる考え方であり、態度である。デュルケームの考え方がどういう根拠から出ているから、それは適正であるとか、現実を反しているというのなら、問題はないが、他に類した問題を扱いながらそれをもとにして異なった政策論があるのを知らないのは残念であるというのはアングロ・サクソンの功利主義を絶対視するものであろう。そうした批判は受容できないであろう。Mill や Weber や Marx の立論はそれぞれの直面した現実と関係するし、同じく工業化といっても欧州の国すべてが同一型に属しているのではないとすればそこから出てくる政策論の内容が異なるのは当然で、それによって内容の優劣はきめられない。資本主義といっても資本蓄積の状況、プロレタリア化の状況は英、独、佛の間には大きな差がある。例えば第三共和制の成立の時点でみてもフランスは英、独に比べれば工業人口の比率は一番少ないし、農村人口の比率も最も高い。最近の G. Noiriel の著作によってもフランスの労働階級の成立は英独に比べて時期的に集中化しておらず、19世紀半頃から20世紀第一次大戦後まで長期間に徐々に進行している。それは Tilly が同書の P. 104 以下にのべるデュルケームの説明の歴史的含意にのべられているところに該当するものと考えられるが、「歴史的含意」に含まれる説明は必ずしもフランスの歴史的な工業化の条件ではなくて、それまでの所説の要約であるが、若干の補足もあるのでその要点を示すと次のとおりである。⁴⁶⁾

第一はデュルケームの指摘している歴史的論議に関する伝統的社会統制の弱体化、個人的利益の際限のない追求などが生じるのはアノミー状態が原因なのであろうかと彼は自問する。そして人間の活動力を抑制し、本来守らるべき限界を指示するものがなければ、それらは偶然にまかせて作用して相互に衝突することになり、相互に力を弱めることになるのは当然であると Tilly はいう。しかしこの万人の万人に対する戦いという Hobbes

43) *Op cit.*, p. 103

44) *Op cit.*, p. 104

45) G. Noiriel, *Les ouvriers dans la société française XIX-XX siècle* (1986).

46) *Op cit.*, p. 104-105

の仮定はデュルケームの仮定ではない。アノミーという語が用いられたのも基本的には人間の社会には何らかの規制が存在するのが当然なのに、それが無い状態を指すために用いられたものである。しかしそれは功利主義理論の仮定とは別の次元のものであることを知らなければならない。だからデュルケーム理論を Conflict 理論であるとかないとかいうこと自体が問題である。デュルケームはいわゆる Conflict のない integration を考えたのではなく Conflict はあっても integration は可能であるとみるのである。

第二にデュルケームは社会の組織の構造と道徳の間の短期的破壊は急速な変化、加速度的な工業化によって生ずるものと指摘しているが、Tilly はこれに対してわれわれの歴史的資料によれば、急速な農村人口の都市流出、大量の工業化と重要な経済的変動が異常な紛争や抗議運動の発生を促すことが合理的に期待されるのであるという。⁴⁷⁾しかしこれも工業化の進展の時期、速度がみなイギリスの例にならっていることを前提している。フランスの工業化の進み方はそれとは全く異なっていることは改めて説明の要はないであろう。

第三に Tilly は無秩序の形態—個人的、集合的、無政府的などがともに変化していて、異常な自殺の増加と近代社会の一般的な不安は同じ原因から生じているというデュルケームの説に対して、歴史的にはこの見解は犯罪、自殺、紛争、抗議を同一の状況の中において見るようにさせているという。しかしデュルケームは自殺は扱ったが犯罪についての詳しい研究は存在しない。紛争についての研究は Tilly 自身のは有名であるが、デュルケームは具体的にはそれを行ってはいない。もちろんデュルケームの自殺の統計的研究については M.Halbwachs のその後の研究により問題点は明らかにされている。しかし Tilly のいうようにいわゆるアノミー的要素についての総括的な研究はないし、アノミーの用語はデュルケーム自身20世紀にはいつてからの著作では全く脱落しているのである。そして第三の点について Smelser の著作からかなり長文を引用してその用語を

少しかえればデュルケームの自殺論や分業論などにおける世紀末のヨーロッパにおける社会不安状況の説明と同じであり、その限りにおいてデュルケームの論議は依然として今日の社会学の理論づけにとって意義と認めている。⁴⁸⁾しかしそれにもかかわらず、G.Homans がかつてのべた言葉を引用して、デュルケームの理論は社会学のカリキュラムにおける理論の歴史上もはや顧みる用はないとのべ、デュルケームの理論はもう役にたてなくなっているとその意義を否定している。100年前のデュルケームの説が今日もそのまま全部妥当するとみる人は一人もいないであろう。問題は社会学と歴史の接近についてデュルケームの理論がどの点で、またどのような意味で意味をもっているかを明かにすることである。それを見出すためにはデュルケームの理論全体をそれが発表された時期の順にもう一度見直すことが必要である。Tilly の発言はむしろその点の重要性を教えているのである。

V 結論

最近になって、社会学と歴史の関係を見直そうとする動きが現れ出したように見える。また社会学の成立以降百年の歳月を経た今日、従来の古典理論に対してその原理を見直そうとする動きがたとえば G.Dubet の著作⁴⁹⁾に現れてきているし、もっと以前からエリアスの「社会学と歴史」などにもそういう試みはある。デュベの試みは社会学が成立した時代と今日とでは対象である国民社会の状況が第三世界の出現と新興勢力の登場などによって大きい変化をとげてきていることや理論を扱う主体側にもそれ自身の位置づけや構成要素の変化によって影響をうけざるを得なくなっている。こうした現状を直視して社会学に課せられた多くの課題を顧みるときわれわれは社会学がこの21世紀という歴史的転期にのぞんでどういう使命をもつべきかが改めて問われているといえよう。社会学は出発時以来歴史的発展に対し自己を位置づけることを要請されてきた。ただその歴史的役

47) *Ibid.*

48) *Op cit.* p. 105

49) Dubet, *Sociologie de la expérience* (1995).

割を果たしていく過程において学問の専門分科の著しい進歩と社会学的世界の相対的安定によってともすれば歴史的視点を見失うような状況となつて今日を迎えているように思える。かつての grand theory の時代は去つたが眼前のミクロの世界ないし問題のない状況だけに自らを局限しなければならぬ、それに満足すべきであるとはいえない。grand theory のもっていた歴史的な方向づけを回復することが要求されるし、民族的多様性とそれらの多様な歴史的展開の状況に対して広い眼を向けることが要求されている。その意味で古典的社会学に確固とした地点をしめるデュルケーム理論の歴史との接点を顧みようとした一つの企図がこの試作である。デュルケームはその試みに完全に成功したわけではないが、しかしその理論構成の中には将来への示唆を与えてくれるものが少なくない。それを指摘しようとしたのが本稿であり、筆者はこの努力はさらに深められるべきものであると信じている。

略字一覧表

AJS—American Journal of Sociology
 BJS—British Journal of Sociology
 SQ—Sociological Quarterly
 ST—Sociologie du Travail

参考文献

- L'Année Sociologique* (1 série) Vols 1. 2. 4
 E. Durkheim, *De la division du travail social*
 " , *Le Suicide*.
 " , *Les formes élémentaires de la vie religieuse*
 " , *L'Evolution Pédagogique en France* (邦訳 フランス教育思想史(小関訳)
 デュルケーム、モンテスキューとルソー(小関、川喜多訳)
 デュルケーム、「家族論集」(小関訳)
 エリアール「社会学と歴史」
 Georges Balandier, *Le sens et la puissance* (1972)
 J. M. Berthelot, *Durkheim, Les Règles de la méthode sociologique 1895*.
 J. M. Berthelot, *Durkheim, L'Avènement de la sociologie scientifique*
 Mike Gane, *The Radical Sociology of Durkheim and Mauss*
 Gérard Noiriel, *Les ouvriers dans la société française XIV et XX^e siècle*, 1986
 G. Dvry, *Durkheim, choix de textes avec étude du système sociologique (1911)*.
 Charles Tilly, *As Sociology Meets History (1981)*.
 G. Dubet, *Sociologie de l'expérience (1995)*.

Sociology and History

ABSTRACT

At the turn of the century, Sociology seems to be facing the time to reshuffle the theoretical approach. With regard to this, Durkheimian theory—essentially implying a dynamic approach—deserves to be reexamined.

Key Words : Durkheim, Historical view of Total Society, Historical Sociology